

## 10 Mayer–Vietoris 完全列 (3)

コチェイン複体の短完全列  $0 \rightarrow \mathcal{A} \xrightarrow{f} \mathcal{B} \xrightarrow{g} \mathcal{C} \rightarrow 0$  が誘導するコホモロジーの長完全列

$$\begin{array}{ccccccc} \cdots & \longrightarrow & H^{k-1}(\mathcal{B}) & \xrightarrow{g_{k-1}^\sharp} & H^{k-1}(\mathcal{C}) & \xrightarrow{\delta_{k-1}} & \\ & & & & & & \\ & \curvearrowleft & H^k(\mathcal{A}) & \xrightarrow{f_k^\sharp} & H^k(\mathcal{B}) & \xrightarrow{g_k^\sharp} & H^k(\mathcal{C}) \xrightarrow{\delta_k} \\ & & & & & & \\ & & \curvearrowleft & H^{k+1}(\mathcal{A}) & \xrightarrow{f_{k+1}^\sharp} & H^{k+1}(\mathcal{B}) & \longrightarrow \cdots \end{array}$$

を考える。 $H^k(\mathcal{A})$  における完全性は次のような diagram chasing によって示される。（コチェイン複体  $\mathcal{A}$  を構成するベクトル空間を  $A^k$ （ただし  $k \in \mathbb{Z}$ ）と書き、線形写像  $A^k \rightarrow A^{k+1}$  は  $d_A^{(k)}$  などと書かずに単に  $d$  であらわす。 $\mathcal{B}, \mathcal{C}$  についても同様。）

〈 $\text{Im } \delta_{k-1} \subset \text{Ker } f_k^\sharp$  の証明〉 任意に  $[\alpha] \in \text{Im } \delta_{k-1}$  をとる。 $\text{Im}$  の定義により  $[\alpha] = \delta_{k-1}([\gamma])$  とあらわせる。ただし  $\gamma \in C^{k-1}$  は  $d\gamma = 0$  をみたす。

ここで  $\delta_{k-1}$  の定義を思い出す。 $g_{k-1}(\beta) = \gamma$  となる  $\beta \in B^{k-1}$  をとり、さらに  $f_k(\alpha') = d\beta$  をみたす  $\alpha' \in A^k$  をとる。自動的に  $d\alpha' = 0$  であることに注意して、 $\delta_{k-1}([\gamma]) = [\alpha']$  と定めるのだった。前段落では  $[\alpha] = \delta_{k-1}([\gamma])$  としたのだから、 $[\alpha] = [\alpha']$  である。

したがって

$$f_k^\sharp([\alpha]) = f_k^\sharp([\alpha']) = [f_k(\alpha')] = [d\beta] = 0.$$

すなわち  $[\alpha] \in \text{Ker } f_k^\sharp$  である。

〈 $\text{Ker } f_k^\sharp \subset \text{Im } \delta_{k-1}$  の証明〉 任意に  $[\alpha] \in \text{Ker } f_k^\sharp$  をとる。すると  $f_k^\sharp([\alpha]) = 0$  つまり  $[f_k(\alpha)] = 0$  である。ゆえに  $f_k(\alpha) = d\beta$  をみたす  $\beta \in B^{k-1}$  が存在する。そのような  $\beta$  を任意に一つとり、 $\gamma = g_{k-1}(\beta)$  とおく。すると

$$d\gamma = d(g_{k-1}(\beta)) = g_k(d\beta) = g_k(f_k(\alpha)) = 0$$

である。

$d\gamma = 0$  であることから  $[\gamma]$  が定義される。これについて  $\delta_{k-1}([\gamma])$  は何か、定義にしたがって順番に考えてみると、 $g_{k-1}(\beta) = \gamma$ 、 $f_k(\alpha) = d\beta$  より  $\delta_{k-1}([\gamma]) = [\alpha]$  である。したがってとくに  $[\alpha] \in \text{Im } \delta_{k-1}$  であることがわかった。

51. 上記の長完全列の  $H^k(\mathcal{B})$  における完全性を示せ。

52. 上記の長完全列の  $H^k(\mathcal{C})$  における完全性を示せ。[ヒント：しばらく考えてわからなければ、L. W. Tu 『トゥー 多様体』（裳華房）定理 25.6 の後の説明をみよ。]

53. 多様体  $M$  上の微分形式  $\omega$  について、その台  $\text{supp } \omega$  とは  $\{p \in M \mid \omega_p \neq 0\}$  の  $M$  における閉包のことである。

コンパクトな台をもつすべての微分  $k$  形式からなるベクトル空間を  $\Omega_c^k(M)$  で表す。外微分作用素  $d$  は  $\Omega_c^k(M)$  を  $\Omega_c^{k+1}(M)$  の中に写す\*。コチェイン複体

$$\cdots \xrightarrow{d} \Omega_c^{k-1}(M) \xrightarrow{d} \Omega_c^k(M) \xrightarrow{d} \Omega_c^{k+1}(M) \xrightarrow{d} \cdots$$

のコホモロジ一群  $H_{\text{dR}, c}^k(M)$  を、 $M$  のコンパクト台をもつ de Rham コホモロジ一群という ( $M$  がコンパクトなら普通の  $H_{\text{dR}}^k(M)$  と同じもの)。

さて、 $M$  の開集合  $W$ 、 $\tilde{W}$  のあいだに包含関係  $W \subset \tilde{W}$  があるとき、 $\omega \in \Omega_c(W)$  は、 $W$  の外の各点における値を 0 と定めることで  $\tilde{\omega} \in \Omega_c(\tilde{W})$  へと拡張できる。この「ゼロ拡張」を与える線形写像を  $z_W^{\tilde{W}} : \Omega_c(W) \rightarrow \Omega_c(\tilde{W})$  であらわす。そのとき、

$$\begin{aligned} f_k : \Omega_c^k(U \cap V) &\rightarrow \Omega_c^k(U) \oplus \Omega_c^k(V), & \alpha &\mapsto (z_{U \cap V}^U(\alpha), -z_{U \cap V}^V(\alpha)), \\ g_k : \Omega_c^k(U) \oplus \Omega_c^k(V) &\rightarrow \Omega_c^k(M), & (\beta_1, \beta_2) &\mapsto z_U^M(\beta_1) + z_V^M(\beta_2) \end{aligned}$$

とおけば、

$$\begin{array}{ccccccc} & \vdots & & \vdots & & \vdots & \\ & \downarrow d & & \downarrow d & & \downarrow d & \\ 0 \longrightarrow \Omega_c^k(U \cap V) & \xrightarrow{f_k} & \Omega_c^k(U) \oplus \Omega_c^k(V) & \xrightarrow{g_k} & \Omega_c^k(M) & \longrightarrow 0 \\ & \downarrow d & & \downarrow d & & \downarrow d & \\ 0 \longrightarrow \Omega_c^{k+1}(U \cap V) & \xrightarrow{f_{k+1}} & \Omega_c^{k+1}(U) \oplus \Omega_c^{k+1}(V) & \xrightarrow{g_{k+1}} & \Omega_c^{k+1}(M) & \longrightarrow 0 \\ & \downarrow d & & \downarrow d & & \downarrow d & \\ & \vdots & & \vdots & & \vdots & \end{array}$$

がコチェイン複体の短完全列となることを示せ。

問題 53 でえられた短完全列に定理 10.1 を適用して  $H_{\text{dR}, c}^k$  に関する Mayer–Vietoris 完全列をえる。これは具体的な計算に役立つほか、たとえば「Poincaré 双対性」の証明にも用いられる†。

次の問題では、Poincaré 双対性の特別な場合にあたる「連結かつコンパクトな  $n$  次元多様体  $M$  について、さらに  $M$  が向きづけ可能ならば  $H_{\text{dR}}^n(M) \cong \mathbb{R}$  である」という事実を使う（向きづけ可能性の定義は次回与える）‡。3 次元実射影空間  $\mathbb{RP}^3$  は向きづけ可能なので、 $H_{\text{dR}}^3(\mathbb{RP}^3) \cong \mathbb{R}$  である。

54.  $H_{\text{dR}}^k(\mathbb{RP}^3)$  を  $0 \leq k \leq 3$  について求めよ。ただし  $H_{\text{dR}}^3(\mathbb{RP}^3) \cong \mathbb{R}$  は既知としてよい。  
[ヒント：問題 46 と同様の開集合  $U$ 、 $V$  に関する Mayer–Vietoris 完全列を用いる。]

\*なぜなら  $\text{supp } d\omega \subset \text{supp } \omega$  だから。

†R. Bott & L. W. Tu, *Differential Forms in Algebraic Topology*, Springer の第 5 節をみよ。

‡同じ前提のもとで、 $M$  が向きづけ可能でなければ  $H_{\text{dR}}^n(M) = 0$ 。